

# 認知行動的アプローチによる収集強迫傾向者に焦点を当てたワークブックを使った介入プログラムの有効性に関する検討

Development and examination of cognitive-behavioral approach  
for compulsive hoarding with a workbook.

野崎 健太郎 (Kentaro Nozaki)

指導：嶋田 洋徳

## 【問題と目的】

強迫性障害の治療については、曝露反応妨害法が中心的な治療技法となりうることが明らかにされている。しかしながら、曝露反応妨害法には、患者の治療動機や問題点、課題が数点挙げられてきており、その上、曝露反応妨害法が有効とされないケースも示唆されている(飯倉, 2005)。こうした治療反応性が低いケースについて、症状に対する洞察や生活妨害感の少なさが共通する特徴として認められる場合が多いとされている。そこで研究1では、その特徴を有している収集強迫傾向者に関して、曝露反応妨害法における治療反応性の低さが生じていることをメタ分析によって確認する。研究2では、行動的介入だけでは不十分とされる収集強迫傾向者について、カテゴリカルスキルの習得を目指した認知的な介入を取り入れた、認知行動的介入プログラムの開発を行い、その有効性について検討する。

## 研究1: 収集強迫における曝露反応妨害法の治療反応性に関するメタ分析による検討

### 【方法】

PsycINFO を用いて、「obsessive-compulsive disorder (OCD)」, 「symptom」, 「response」というキーワードのもと、論文を検索した。そして、強迫性障害のサブタイプ別に介入の効果検討を行っており、収集強迫に関する記述も確認できるなどの基準を設けて、メタ分析のための論文を選択した結果、3論文が抽出された。

### 【結果と考察】

収集強迫傾向者に対する曝露反応妨害法は、非収集強迫傾向者に対する曝露反応妨害法と比較して、改善効果が有意に小さかった( $d=-0.37, p<.05$ )。収集強迫に関して、従来から用いられている曝露反応妨害法では改善効果が認められないことが分かった。したがって、収集強迫に特化した介入プログラムの作成が望まれる。

## 研究2: 認知行動的アプローチによる収集強迫傾向者に焦点を当てたワークブックを用いた介入プログラムの有効性に関する検討

### 【方法】

参加者: Y-BOCS 日本語版(浜垣ら, 1999)によるスクリーニングを行い、収集強迫に関して生活妨害感を感じている大学生10名(男性5名, 女性5名; 年齢 $21.14 \pm 2.12$

歳)に対して、自宅での介入を行った。

手続き: 参加者は介入の詳細について説明を受けた後、ワークブックとモニタリング用紙、質問紙の使用方法について学んだ。その後、ワークブック使用前のアセスメント質問紙への記入を求められた。ワークブックとモニタリング用紙、質問紙は自宅に持ち帰り、ワークブックに沿って作業を行った。作業終了後、ワークブック使用後のアセスメント質問紙への記入を行った。モニタリング用紙、アセスメント質問紙、知識チェックシートの3点については、実験者へ返却した。

介入プログラム内容: ①心理教育(症状理解, 治療動機の向上), ②カテゴリカルスキルの習得(意志決定スキルの向上および物品の分類化・統合化の促進), ③エクスポージャー(所有物廃棄の際の不安低減), ④認知的再体制化(物品の廃棄に関する利益, 不利益の客観視)

従属変数: ①STAI-S(所有物を廃棄する際に生じる状態不安), ②Y-BOCS(収集強迫に関連する強迫症状の程度および影響性), ③介入プログラムに関する評定, ④知識チェックシート(理解度・知識獲得度)

### 【結果と考察】

Y-BOCS 強迫症状得点および下位項目4項目得点において、ワークブック使用前と使用後とを比較して、有意に低減または低減する傾向が見られた( $p<.05 \sim .10$ )。所有物廃棄の際の状態不安についても同様に、ワークブック使用前と使用後とを比較して、有意に低減していた( $p<.01$ )。このことから、本研究で作成した介入プログラムによって、収集強迫症状ならびに所有物を廃棄する際の精神的苦痛に対して低減することが認められたと言える。

### 【総合考察】

本研究では、従来の研究ではあまり検討されてこなかった認知的な介入技法を取り入れ、収集強迫症状の改善を試みた。その結果、収集強迫症状の改善が認められた。認知的な介入技法である「カテゴリカルスキルの習得」について、最も有用であったという参加者による回答が得られており、その有効性の高さがうかがわれる。今後は、「カテゴリカルスキルの習得」単独の効果の大きさを検討するために、実験群設定の工夫、介入プログラムにおけるプロセス変数の考慮など、さらなる検討が必要であると言える。